

# KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

## 『ジキル博士とハイド氏』の酒が示唆する上下構造

メタデータ	言語: ja 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2024-03-16 キーワード (Ja): ゴシック小説, 世紀末文学, 19世紀 キーワード (En): 作成者: 浅田, えり佳 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	<a href="https://doi.org/10.18956/0002000152">https://doi.org/10.18956/0002000152</a>

# 『ジキル博士とハイド氏』の酒が示唆する上下構造

浅田 えり佳

## 要旨

ロバート・ルイス・ステューヴンソンの『ジキル博士とハイド氏』(1886)について、象徴的に描かれる酒と変身が上昇・下降のイメージを共有していることを論じている。

本作品では随所でワインとジンが対比されているが、変身薬は調合に伴い水蒸気が生じる点と色彩の変化において、ジンと結び付けられていると推定できる。度々言及される霧も蒸気と近縁であってジンおよび変身薬と同類であり、ハイド同様に屋内への侵入者として描かれている。ジキルによると肉体は霧のようなものであり、それを一時分散させて第二の魂の形に凝固することが変身の原理であるとされるが、これは蒸留過程と酷似している。本作における変身とは魂の上下関係にはたらきかけ、下位の人格が上昇し領域侵犯することで生じるものであり、上下運動および蒸発と凝固という二種の酒はこの作品の核心を象徴するものである。

キーワード：ゴシック小説、世紀末文学、19世紀

## I

ロバート・ルイス・ステューヴンソン (Robert Louis Stevenson, 1850-94) による『ジキル博士とハイド氏の奇妙な事件』(*The Strange Case of Dr Jekyll and Mr Hyde*, 1886、以下『ジキル博士とハイド氏』)は、ヘンリー・ジキル (Henry Jekyll) という紳士が、夜な夜なエドワード・ハイド (Edward Hyde) という悪の人格に変身する奇譚として日本でもよく知られている作品である。霧に包まれたロンドン、夜陰に乗じて欲望のままに悪行を働く怪人といったモチーフは、本作品を19世紀末イギリスのゴシック小説を代表するにふさわしいものとしている。

『ジキル博士とハイド氏』の出版からまもなくジークムント・フロイト (Sigmund Freud) が精神分析という分野を提唱して以降、人間の無意識についての探究が盛んになったこともあり、「二重人格」の代名詞としてこの作品(ないし主人公)が引き合いに出されることも多いのは周知の事実である。二重人格(解離性遁走)が認められた最初の事例として、1857年頃のアメリカ人アンセル・ボーン (Ansel Bourne) なる人物について記録されているが<sup>1)</sup>、記憶を共有していない点は異なるものの、別の名で別の家に住み、全く違った生活を送っていた点で『ジキル博士とハイド氏』に通じるところがある。(ちょうど本作品の出版の翌年、このボーン

は突如として行方不明となり2ヶ月の間別人として生活していたところを発見されたという。) また、フロイトと共著で『ヒステリー研究』(*Studien über Hysterie*, 1896)を発表したヨーゼフ・ブロイアー(Josef Breuer)は、1880年代にアンナ・オことベルタ・パッペンハイム(Bertha Pappenheim)なる女性が二重人格の症状を呈したことを記録している<sup>2)</sup>。

二重人格を題材とした文学作品の例を挙げるのであれば、『ジキル博士とハイド氏』に先駆けてエドガー・アラン・ポーが『リイジア』(*Ligeia*, 1838)、『ウィリアム・ウィルソン』(*William Wilson*, 1839)を上梓している。前者が、死んだ妻が後妻に憑依するというゴシック風の内容であるのに対して、後者は同姓同名のよく似た人物がつきまとうというドッペルゲンガーを描いたものであるが、ウィリアム・ウィルソンの悪事を行く先々で挫く第2のウィリアム・ウィルソンが彼の良心(“conscience”)であるとされている点は<sup>3)</sup>、対外的には善人であるジキルと悪人のハイドという対立構造と類似している。また、『ジキル博士とハイド氏』の出版から5年後、アーサー・コナン・ドイル(Arthur Conan Doyle)は『ストランド・マガジン』(*The Strand Magazine*)9月号および12月号に、それぞれ『花婿失踪事件』(*A Case of Identity*)、『唇の捻れた男』(*The Man with the Twisted Lip*)を掲載している<sup>4)</sup>。これらは二重人格でこそないが、2人の人物を1人の男が欲のために演じて二重生活を送り、やがて片方が姿を消すことに加え、タイプライターの印字の欠けや筆跡によって同一人物であることがホームズ(Sherlock Holmes)に看破されるという点は、ジキルとハイドの筆跡が同じであることをアタソンが不審がることと酷似している。

本論では、精神分析的なアプローチによりジキルからハイドへの変身を紐解くのではなく、変身にまつわる上下動のイメージに着目する。本作における平面的・図面的な描写やそれに基づいたアプローチは度々試みられてきた。ウラジーミル・ナボコフ(Vladimir Nabokov)の『文学講義』(*Lectures on Literature*, 1980)には、ジキル邸と「強請りの家」(“Black Mail House”)の扉、およびハイドが少女と衝突した四つ辻とアタソンらの散歩道の位置関係について、彼の教え子が書き起こした地図にナボコフが修正を加えたものが掲載されている<sup>5)</sup>。

しかしながら、変身に用いられる薬液と作品中に象徴的に登場する2種の酒との類似性、およびそれらとジキルによる変身の形而上的な理論説明のどちらにおいても上昇や下降、それに伴う上下関係の逆転を読み取ることができる。よって、本稿では『ジキル博士とハイド氏』における垂直方向の関係性について考察する。

## II

『ジキル博士とハイド氏』において、ジンとワインが対比的に描かれ、特にワインはジキルが抱える暗い秘密・孤独の寒々しさに対して、人間的な情愛や喜びが生み出すあたたかみを象

徴していることは明白である。この対比は作品の初め、視点人物であるアタソンの人物像の紹介において現れる。

At friendly meetings, and when the wine was to his [Utterson's] taste, something eminently human beamed from his eye; . . . He was austere with himself, drank gin when he was alone, to mortify a taste for vintages; . . . (5)

気のおけない集まりの場で葡萄酒が口に合うと、彼の目に何か極めて人間味の有る輝きがともった。(中略) 彼は禁欲的で、独りの時はジンを飲み、葡萄酒を楽しむことは自制した<sup>6)</sup>。

他方、ジンについてはナボコフが『文学講義』において興味深い考察を提示している。

There is a delightful winey taste about this book; in fact, a good deal of old mellow wine is drunk in the story: one recalls the wine that Utterson so comfortably sips. This sparkling and comforting draft is very different from the icy pangs caused by the chameleon liquor, the magic reagent that Jekyll brews in his dusty laboratory. (Nabokov 180)

この小説には芳醇なワインの味がある。現にこの物語では年を経て熟したワインが大量に飲まれている。アタソンがたいへん心地よくすする葡萄酒が思い出される。この泡立つ心地よい飲み物は、カメレオンのように人を変貌させる蒸留酒、ジキルが埃をかぶった実験室で醸造する魔術的な試薬が引き起こす氷のように冷たい苦痛とは、ぜんぜん異なるものだ。(ナボコフ 13)

ナボコフは、それぞれの酒が持つイメージ—人間的な温かみの有無—について類似性を指摘しているが、この2種類の酒はそれ以上にジキルとハイドの変身と大きく関わっている。

核心に触れる前に、まずは変身薬とジンの見た目上の類似性を取り上げる。ジキルが友人であるラニョン医師 (Dr. Lanyon) の眼前で披露してみせた変身薬の調合の様子は、蒸発を経て、まさに葡萄酒のような赤色から薄い緑色へと退色していくのである。

He [Hyde] thanked me [Lanyon] with a smiling nod, measured out a few minims of the red tincture and added one of the powders. The mixture, which was at first a reddish hue, began, in proportion as the crystals melted, to brighten in colour, to effervesce audibly, and to throw off small fumes of vapour. Suddenly and at the same moment, the

ebullition ceased and the compound changed to a dark purple, which faded again more slowly to a watery green. (53)

彼は笑みを浮かべてうなずきながら私に札を言うと、赤いチンキを数滴量り、1包みの粉末を加えた。最初は赤味を帯びていた調合薬は、結晶が溶けるにつれて色味が明るくなり、音を立てて泡立ち、少量の水蒸気を発した。すると突然、沸騰が止まり調合薬は暗い紫色に変わり、更にゆっくりと淡い緑に変色していった。

蒸留酒と醸造酒は製造ないし熟成の過程でそれぞれ上昇と下降のイメージを持つ。蒸留酒は製造過程で蒸発を伴う。また、一度拡散した蒸気は冷却により液体として凝縮する。他方、醸造酒は不純物が長い年月のうちに澱として沈む。また、『ジキル博士とハイド氏』においてはヴェンテージボトルの中で酸が溶解している様 (“the acids were long ago resolved”, 28) が描かれており、蒸留酒とは対象的に拡散のイメージを持つ。ここに挙げた上昇と下降、および凝縮と拡散は、ジキルの説明する変身の原理にも共通する点である。変身の原理はジキルによって以下のように語られている。

I began to perceive more deeply than it has ever yet been stated, the trembling immateriality, the mist-like transience, of this seemingly so solid body in which we walk attired. Certain agents I found to have the power to shake and to pluck back that fleshly vestment, even as a wind might toss the curtains of a pavilion. (56)

私は、我々が纏って歩いている一見して堅固に見える肉体というものが、揺らぐ非物質的なものであり、霧のように儂いものであることを、これまで語られてきた以上に深く理解し始めた。ちょうど風が天幕を翻すように、肉体という衣を揺り動かし引きはがす力を持つ薬品を私は見つけたのだ。

あくまでこれはジキルの持つイメージの描写に過ぎないが<sup>7)</sup>、固体として安定しているように見えて実は不安定な霧のような集合体が風に吹かれるように一時分散し、ハイドの肉体の形として再び集合することが示唆されている。つまり肉体の変身もまた、蒸気が冷却され溜まる蒸留酒と同様のイメージを持っている。

### III

蒸留酒はその製造過程において変身そのものを象徴している一方、ハイド的なものの象徴でもある。元を正せば、変身薬はジキルからハイドへと変身することを目的として作られたもの

であり、当初はジキルへ戻るのに薬は必要なかった。ハイドの人格が肥大するに連れ、ジキルに戻るために薬を必要とするようになるが、変身薬は本来「戻る」ためのものではなかったのだ。それに加え、当時のロンドンにおいて、ビールと並び安価なジンは貧困層の数少ない慰めの1つであり<sup>8)</sup>、ワインが名士であるジキルとその友人たちに嗜まれる上流の酒であるのとは対比的に、ジンはハイドがねぐらとした猥雑で貧しいソーホーの住人と結びつく。ジキル家の執事・プール（Poole）がアタソンのワインに口をつけないこともワインとジンの間にある価値という上下関係を暗示しており、それぞれがジキルとハイドに照応することで間接的に2つの人格間の上下関係を示唆している。

ところで、現実と同様に、『ジキル博士とハイド氏』で描かれるロンドンにもしばしば霧が現れる。たとえば、ハイドがダンヴァース・カルー卿（Sir Danvers Carew）を殺害する夜やアタソンがソーホーにあるハイドのねぐらに警官を伴う際に街に厚く垂れ込める。特に後者の場面ではたった2つのパラグラフに何度も“fog”という単語が登場する。

It was by this time about nine in the morning, and the first fog of the season. A great chocolate-coloured pall lowered over heaven, but the wind was continually charging and routing these embattled vapours. . . . and here, for a moment, the fog would be quite broken up, and a haggard shaft of daylight would glance in between the swirling wreaths. . . .

As the cab drew up before the address indicated, the fog lifted a little. . . . and the next moment the fog settled down again upon that part, as brown as umber, and cut him off from his blackguardly surroundings. (23; emphases added)

その頃にはもう9時を回ろうとしていて、この季節最初の霧がかかっていた。大きなチョコレート色の棺覆いが天から垂れ込めていたが、風は絶え間なくこれらのたちこめた蒸気を襲い散らそうとしていた。（中略）そしてこちらでは、つかの間霧が割れて、渦巻く霧の間からひと筋の陽光が射し込んでいた。（中略）

示された住所に馬車が停まると、霧が僅かに晴れた。（中略）そして次の瞬間、あたりに土気色の霧が再び立ち込め、取り囲む俗悪な一帯からアタソンを隔てた。

この霧は恐怖や謎めいた雰囲気醸し出す舞台装置として機能しているのはもちろんのことだが、上記引用内で“vapours”（蒸気）とも表記されている点に着目したい。元々“vapour”という単語には霧の意味も含まれるが、先に引用したように、これは変身薬の生成過程に発生する蒸気（“vapours”）と同じ語が用いられており、両者の近似性を示唆している可能性は無視できない。

さらに、アタソンが長年雇用している事務員ゲスト（Guest）との気のおけない間柄が描かれた場面において、霧はワインと対照的に描かれる。

Presently after, he sat on one side of his own hearth, with Mr Guest, his head clerk, upon the other, and midway between, at a nicely calculated distance from the fire, a bottle of a particular wine that had long dwelt unsunned in the foundations of his house. The fog still slept on the wing above the drowned city. . . . and the glow of hot autumn afternoons on hillside vineyard, was ready to be set free and to disperse the fogs of London. (28; emphases added)

しばらくして、アタソンは暖炉の片側に腰掛けた。もう一方には彼の主任事務員のゲスト氏が立っていて、2人の間には暖炉から適当な距離のところに、長らく地下室で日の目を見ずに眠っていたヴィンテージワインが1瓶置かれていた。街は未だ頭上に翼を広げて眠る霧に沈んでいた。(中略) 丘に広がる葡萄畑に射す暑い秋の午後の陽光が今にも解き放たれ、ロンドンの霧を散らすようであった。

引用部からは、ワインは寒気を誘う霧（ジンのもの）に対して情愛という意味での温度があることが明らかに読み取れるが、外界を覆う霧から個人の領域である家を守り、かつ追い散らすものとして描かれる。酸もまた、霧と同類の変身薬の発する刺激臭と重なり、それはワインの中で溶解されている。

アタソンの家と対象的な描写が見られるのがジキル邸である。元々別の建物が奥で繋がっているジキル邸の構造は、それぞれの玄関の外観の差と合わせてナボコフも指摘しているが、アタソンが表から奥にある裏の書斎へと入っていく際に通り過ぎるかつては階段講堂だった部屋は以下のように描かれる。

. . . once crowded with eager students and now lying gaunt and silent, the tables laden with chemical apparatus, the floor strewn with crates and littered with packing straw, and the light falling dimly through the foggy cupola. (26; emphasis added)

かつては熱心な学生たちで埋め尽くされていたが、今は寂しく静まり返り、テーブルには化学実験の機具が積み上げられ、床には木箱が散乱し荷造り用の藁が散らばり、霧のかかったキューボラからうっすら光が差している。

表通りに面したジキルの家から裏取りに面したハイドを象徴する「強請りの家」へ渡り、最初に入ったこの部屋は、混沌と散らかっていてその中に化学の実験機具もある。この機器こそ

変身薬の開発に使われたものと断定はできないが、人体の仕組みを取り扱う解剖教室であったことと合わせれば、ジキルからハイドへの変身を橋渡しする薬を象徴していることは容易に想像できる。そしてその教室のキューポラは霧がかかっている。換気窓であるキューポラから外気が入り込むことは、自然現象という点では異質なことはない。だが、霧が持つ「侵入するもの」としての性質は、ハイドも共有するものである。

Or else he [Utterson] would see a room in a rich house, where his friend lay asleep, dreaming and smiling at his dreams; and then the door of that room would be opened, the curtains of the bed plucked apart, the sleeper recalled, and lo! There would stand by his side a figure to whom power was given, and even at that dead hour, he must rise and do its bidding. (13)

それからまた、アタソンには豪華な屋敷の部屋が見えてくる。そこでは彼の友人が眠っていて、夢を見て微笑んでいる。突然その部屋のドアが開かれ、ベッドのカーテンが勢いよく引かれ、眠っている友人が呼び起こされる。そして、見よ！傍らには力を与えられた人物が立っていて、そんな夜更けであっても彼は起き上がってその命令に従わなければならないのだ。

これはアタソンの想像であり、エレイン・ショウォールター (Elaine Showalter) は同性愛的な欲望を抑制して生きるアタソンの抱くレイプ幻想であると指摘しているが<sup>9)</sup>、ハイドが裏の建物からジキルの領域である表の家に侵入するという点は、霧の領域侵犯の性質と同じであり、かつ支配的な人格としての領域を侵犯されハイドに支配されつつあるジキルの状況と符合している。

#### IV

蒸留酒のように変身薬がその製造過程において上昇のイメージを伴うことは、ジキルの説明する変身の仕組みそのものとの相似性による必然であるとも言える。以下はジキルの告白の手紙の一部である。

I not only recognized my natural body for the mere aura and effulgence of certain of the powers that made up my spirit, but managed to compound a drug by which these powers should be dethroned from their supremacy, and a second form and countenance substituted, none the less natural to me because they were the expression, and bore the



stamp of lower elements in my soul. (56-57, emphases added)

私は、私の生得の肉体は私の精神を構成する力の放つ靈気や光輝に過ぎないということを認識しただけでなく、その力を最高位から追い落とす薬を調合することに成功し、替わりとなる第2の肉体と顔を手に入れたのだった。その肉体と顔は私の魂の内の下等な要素がにじみ出て表れたものだったにもかかわらず、私に自然と馴染んだ。

もちろん魂に3次元の世界のような垂直方向の階列があるわけではないが、より下位にある第2の魂の要素が、最上部にあるヘンリー・ジキルという人間を構成している要素を押し付け代わることにより変身が起きるとジキルは認識している。日頃社会の制約を受けてジキルが必死に水面下に押し込めていた欲望そのものが、ハイドとして頭上にあるジキルを押しつけて現れるのだ。ハイドの身体が度々猿(“ape”, “monkey”)という言葉によって語られることから、ハイドは欲望を統制する理性が発達していない、進化の段階において人間の下位にあたる存在をも象徴していることは明白である。

変身とそれを引き起こす薬の製法両方に付随する上昇と下降は、象徴的にアタソンのジキル邸訪問の際に再現されている。彼は度々ジキル邸に招かれてはいたが、元々別棟だったエリアにはそれまで入ったことがなかった。執事のプールに導かれたアタソンが表玄関から2軒の接続部分を経て件の裏路地に面する書斎へと向かうルートにも、上昇と下降のイメージを読み取ることができる。

... he was at once admitted by Poole, and carried down by the kitchen offices and across a yard which had once been a garden, to the building which was indifferently known as the laboratory or dissecting rooms. . . . he eyed the dingy, windowless structure with curiosity, and gazed round with a distasteful sense of strangeness as he crossed the theatre . . . and the light falling dimly through the foggy cupola. At the further end, a flight of stairs mounted to a door covered with red baize; and through this, Mr. Utterson was at last received into the doctor's cabinet. . . . The fire burned in the grate; a lamp was set lighted on the chimney shelf, for even in the houses the fog began to lie thickly. . . (26; emphases added)

アタソンはプールに招き入れられると、厨房のそばを下ってかつて庭園だった中庭を横切って、いい加減に実験室とも解剖室とも呼ばれている建物へと導かれた。(中略) 彼はその薄汚れた窓の無い建物に好奇の目を向け、階段教室を横切の際に不快な違和感と共に視線を巡らせた。(中略) そして霧が立ち込めた円屋根からうっすらと光が射し込んでいた。その最奥の階段を上ると、赤いベーズ生地に覆われたドアがあり、それをくぐってアタソ

ンはやっと博士の書斎に足を踏み入れた。(中略) 暖炉には火が入っていて、室内だというのに霧が濃くなり始めていたので、炉棚にはランプが灯され置かれていた。(後略)

先にも述べたが、この教室では肉体の構造を解き明かすことを目指した解剖学が学ばれていたとされる。しかし、かつて学生たちが熱心に学んだその学問は、ジキルが到達した「私の生得の肉体は私の精神を構成する力の放つ霊気や光輝に過ぎない」という真理とそれを実証する変身という驚異の前には無力である。それを示すようにこの階段教室はもはや本来の機能を果たしてはおらず、物置と化し、その形而下的な研鑽の敗北を嘲笑するかのようになり、この階段教室は変身を象徴する霧の介入を許している。加えて、ジキルの最後の砦である書斎にまで霧が侵入していることは、ハイドによりヘンリー・ジキルという人間が大いに侵食されていることを意味している。

ハイドを擁する混合物としてのジキルの最奥部に至るにあたって、アタソンは1度庭に降りてからキューボラのある垂直方向を強調する階段講堂を抜けて、書斎への階段を上がっていく。上昇を経ることで変身の原理を迫体験し、魂の最高位(“supremacy”)へと上っていくかのようなのである。

ジキルとハイドは対等な表裏一体の存在というより、ハイドはジキルに内包されている一部であることはナボコフも論じているとおりだが、両者の間にはどちらが肉体の姿形に関与するか—肉体に関与し得る魂の最上位にあるか—という点において明確な上下がある。故に、ヘンリー・ジキルという人間はジキルとハイドの混合物でありつつも、2つの人格が同時に同じ階層にいるということは無い。このような上下間の隔たりは、他の人物たちが立っている高さにおいても発見できる。つまり、高い位置に立つ人物と低い位置に立つ人物は、ジキルとハイドがそうであるように、その空間を共有することができないのである。

エンフィールドと散歩中のアタソンが、引きこもるジキルを偶然2階の窓辺に見つけた場面は象徴的である。ここでアタソンは「僕たちと散歩しよう」(“Come now; get your hat and take a quick turn with us.” 35)、つまり下に降りてこいと誘うのだが、それに対するジキルの返事は、「僕は君とエンフィールド氏に上ってもらいたい」(“I would ask you and Mr Enfield up,” 35)である。しかしそのどちらも実現されず、会話もそこそこに変身の兆候を感じたジキルが窓を閉めてしまい、上層と下層の交流は不可能に終わる(“But the words were hardly uttered, before the smile was struck out of his face and succeeded by an expression of such abject terror and despair, as froze the very blood of the two gentlemen below.” 35)。また、ここでジキルは自分の状態を表すのに“low”という語を用いている点も興味深い。(“I am very low, Utterson. . . very low.” 35)ここでは、もはやジキルとハイドの上下関係は逆転していて、ジキルの上下の移動はハイドによって制限されている。つまり、変身をジキルは意の

ままに行うことができなくなっていることも示している。

## V

以上のように、本作品における変身は、蒸留酒に似た変身薬により誘発される上昇と下降を伴う作用であり、各人格の表出においても上下の関係性が基準となっている。この上層と下層という区分は不可分のものであり、霧はその境界を侵害するものとして存在する。カルー卿殺害事件やソーホーの隠れ家の搜索など、ハイドと霧は密接に関係しているが、それはハイドの醸し出す不具の感覚と霧のもたらす不安感が類似のものであることに加え、どちらも領域を侵害するものだからだと言える。その領域侵犯の結果としてジキルはハイドに主導権を奪われるが、それはつまりジキルとハイドの魂の上下の階層が入れ替わったことを意味する。ワインとジンは、温かみ・情愛・心地よさと寒々しさ・孤独・背徳といった対比にとどまらず、プロットの根幹をなす変身そのものを象徴しているという点で、本作において非常に重要な役割を果たしている。

## 注

- 1) James 391-92.
- 2) プロイアー 25-64。
- 3) Quinn 286-87.
- 4) 二重生活を見破られた「唇の振れた男」はヒュー・ブーン (Hugh Boone) である。
- 5) Nabokov 187.
- 6) 以降、特に記載がない和訳は筆者による試訳である。
- 7) 変身を目撃したラニオンは次のように表現している：“he[Hyde] seemed to swell - his face became suddenly black and the features seemed to melt and alter” (54)
- 8) Paterson 222.
- 9) ショウォールター 198。

### 参考文献

- Fielding, Penny, editor. *The Edinburgh Companion to Robert Louis Stevenson*. Edinburgh UP, 2010.
- Garrett, Peter K. "Cries and Voices: Reading Jekyll and Hyde." *Dr. Jekyll and Mr. Hyde after One Hundred Years*, edited by William Veeder and Gordon Hirsch, U Of Chicago P, 1988, pp. 59-72.
- James, William. *The Principles of Psychology*. Vol. 1, Henry Holt and Company, 1890.
- Nabokov, Vladimir. "Robert Louis Stevenson." *Lectures on Literature*, edited by Fredson Bowers, Harcourt Brace Jovanovich, 1980, pp. 179-205.
- Paterson, Michael. *Voices from Dicken's London*. David & Charles, 2007.
- Quinn, Arthur Hobson. *Edgar Allan Poe: A Critical Biography*. The Johns Hopkins UP, 1998.
- Stevenson, Robert Louis. *The Strange Case of Dr Jekyll and Mr Hyde and Other Tales of Terror*. Penguin, 2002.
- . *The Master of Ballantrae*. E-book ed., Delphi Classics, 2018.
- . *Markheim*. Jamestown Pubns, 1982.
- 鶴飼信光 「「全くの息子」 Utterson — R. L. Stevenson の *Strange Case of Dr. Jekyll and Mr. Hyde* が訴える "mercy" —」 『文學研究』 第108輯、2011年、1-12頁。
- 武田美保子 『身体と感情を読むイギリス小説』 春風社、2018年。
- 田中孝信、要田圭治、原田範行 『セクシュアリティとヴィクトリア朝文化』、彩流社、2016年。
- 寺田精一 『ロンブローゾ犯罪人論』 巖松堂書店、1917年。
- 平井邦男 「精神分析と哲学」 『大手前女子大学論集』 第8巻、1974年、10-24頁。
- ショウォールター、エレイン 「ジキル博士の秘密の小部屋」 『性のアナーキー』 富山太佳夫 永富久美 上野直子 坂梨健司郎訳、みすず書房、2000年、190-226頁。
- チェズニー、ケロウ 『ヴィクトリア朝の下層社会』 植松靖夫 中坪千夏子訳、高科書店、1991年。
- ナボコフ、ウラジーミル 『ナボコフの文学講義 下』 野島秀勝訳、河出文庫、2013年。
- バターソン、マイケル 『図説 デイケンズのロンドン案内』 山本史郎監訳、原書房、2010年。
- プロイアー、ヨーゼフ ジークムント・フロイト 『ヒステリー研究』 金関猛訳、中央公論新社、2013年。
- ポー、エドガー・アラン 『黒猫／ウィリアム・ウィルソン：仏一英』 シャルル・ボードレール仏訳、調佳智雄 曾根田憲三訳注、大学書林、1985年。

(あさだ・えりか 外国語学部助教)